



県立大生らによる夜の福井新聞社見学会は5月25日深夜から26日未明にかけて

福井市の同社で行われた。締め切り時間を気にして見出しを考える記者の様子や、大きな音を出して新聞を刷る輪転機を見て、新聞製作の現場を体感した。「活字離れ」が指摘される中、新聞を活用した深い学びを提供しようと、同大経済学科の清水葉子准教授



新聞製作「緊張感伝わる」

県立大生が本社見学

輪転機の前で説明を受ける県立大の学生
5月26日未明、福井新聞社

(金融論)らが始めた取り組み「XTRA(エクストラ)」活動の一環。3年生を中心に22人が参加した。新聞社の見学会は初めて。25日深夜に集まった学生はビデオを見て取材記者の仕事などを学んだ後、レイアウトや見出しを担当するメディア整理部の職場を見学した。米朝会談の実施をめぐる原稿が次々と差し替わる中で、整理記者と紙面をチェックするデスクとのやりとりを興味深そうに見ていた。印刷センターでは巨大な輪転機から次々と刷

り上がる紙面を手に見ていた。まだ乾いていないインクが手につくことにも驚いた様子だった。

メディア整理部について3年生の小柳達也さんは「みんなの役割がはっきりして、デスクは細かい指示をしていたよだった。真剣に取り組んでいる様子が分かり、緊張感が伝わってきた。こうやって新聞ができるんだと感じた」と話していた。活動の「XTRA」は「特別なもの」「新聞の号外」を意味する英語「EXTRA」から名付けた。授業に「プラスα」の価値を提供する意味が込められており、新聞製作の工程見学のほか、福井新聞社の記者が県立大に出かけて「新聞読み方講座」なども開いている。(藪内弘昌)